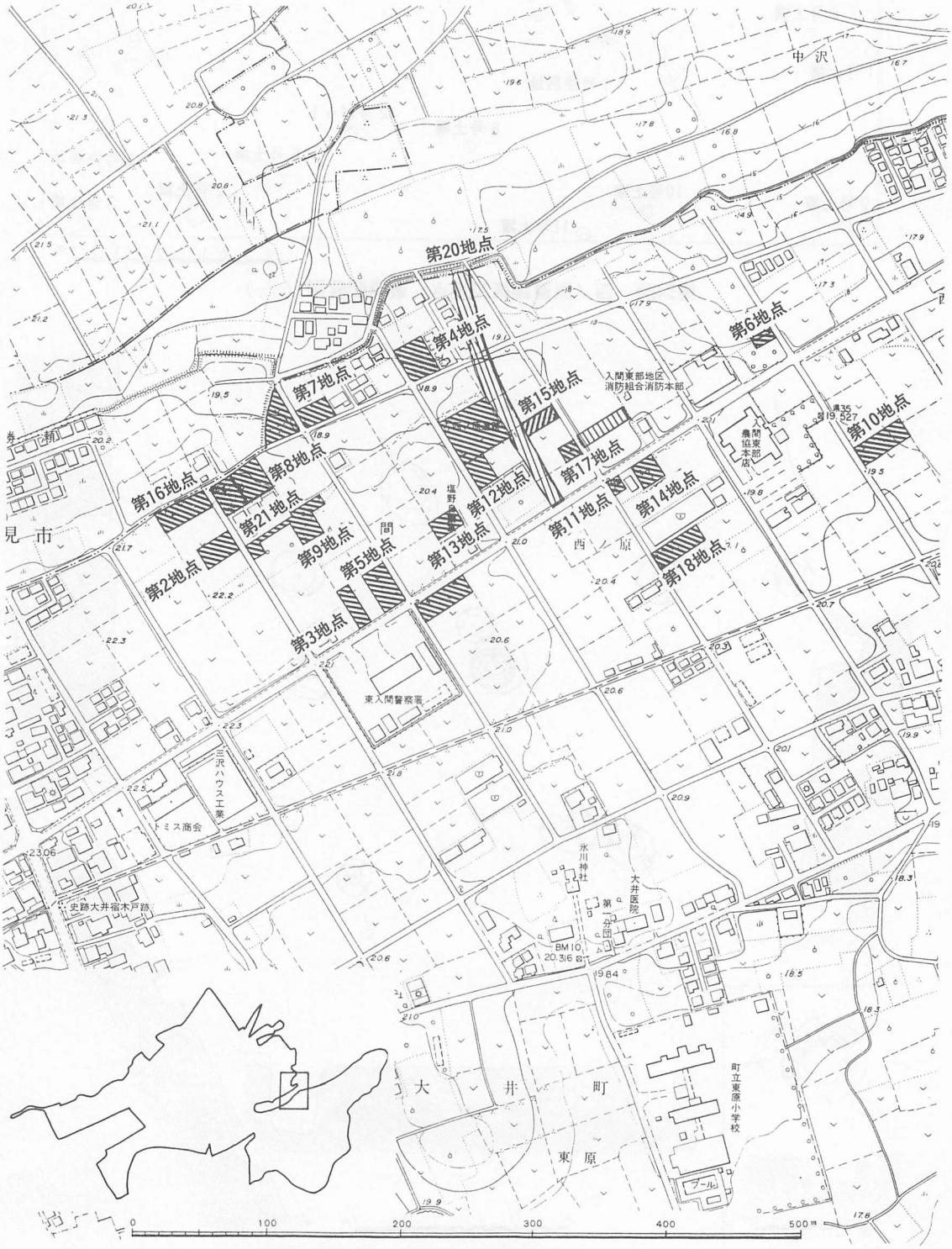
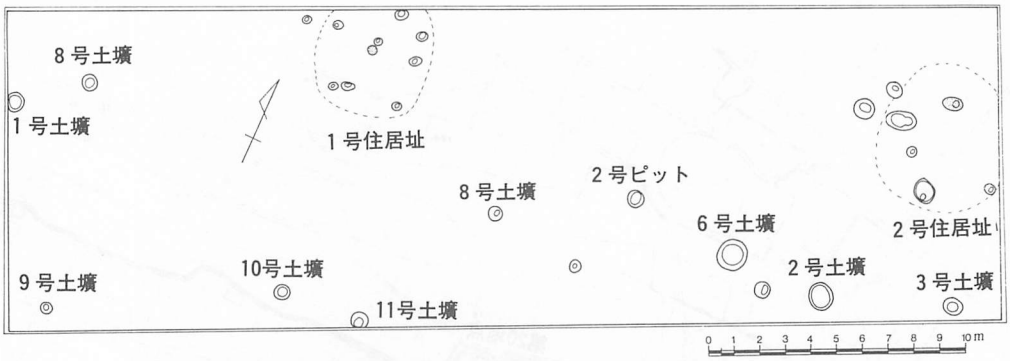
Ⅳ　西ノ原遺跡第22地点



第33図　西ノ原遺跡の地形と調査区（$\frac{1}{5000}$）

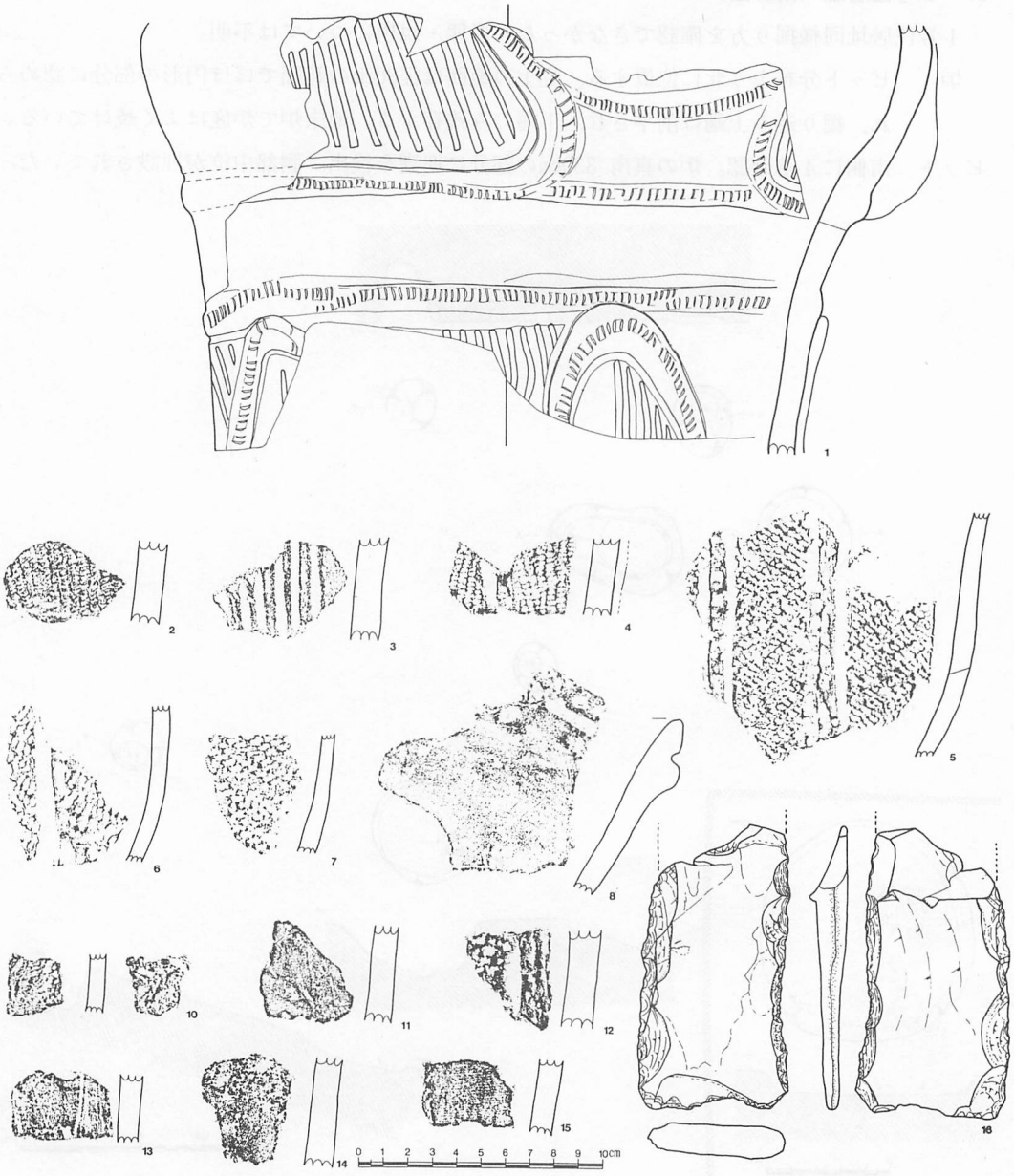


第34図　西ノ原遺跡第22地点　遺構配置図（$\frac{1}{300}$）

第35図　西ノ原遺跡第22地点　1号住居址（$\frac{1}{60}$）

1. 調査の概要　本調査区は遺跡の東側に位置する。民間業者が現地を資材置場に使用するとの理由で，地表面から約40cmを削平している作業中，大井町教育委員会では現地が周知の遺跡包蔵地である旨を業者に伝え，即刻工事を中止させ，急拠発掘調査を実施したものである。

2. 1号住居址（第35図）　住居址の壁はローム層削平の際削り取られ，住居址の掘り方を確認できず，形態・規模等の実態は不明。炉跡はピット分布のほぼ中心に存在。口縁部と胴下半部を欠く土器を使用した土器埋設炉。掘り方は径40cmの円形，深さ15cm。ピットは9基を検出。



第36図　西ノ原遺跡第22地点　1号住居址出土遺物（$\frac{1}{3}$）

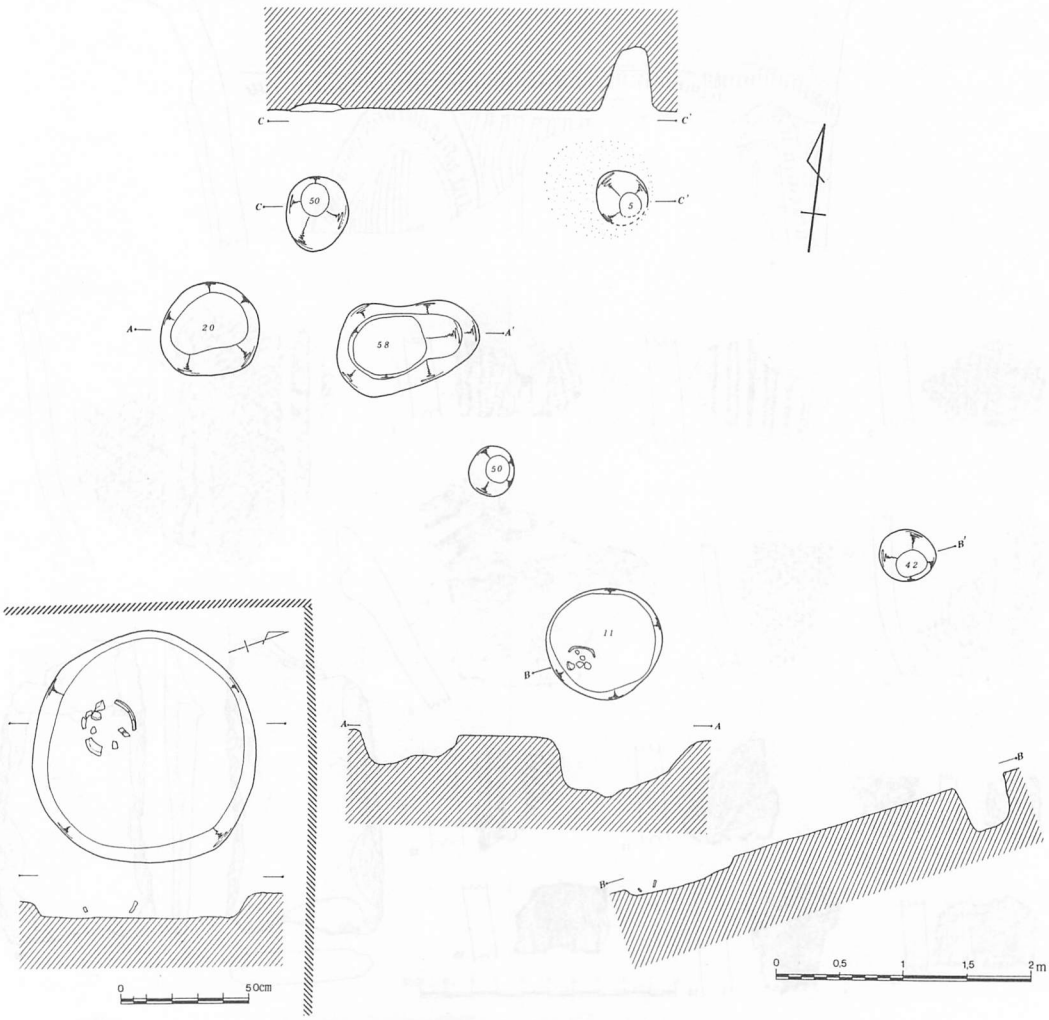
●**遺物（36図）**　炉体土器　1は，キャリパー形深鉢で口縁部上半と胴下半以下を打欠いており，現高18cm。口縁下半は隆帯によって楕円形に区画され，区画内には太い斜位沈線が，隆帯上には細かい爪形文が施される。体部上部は無文帯で，体部文様帯は隆帯によって，大きな波状を描き，区画内には縦位の太い沈線が施される。焼成良好で赤～明褐色を呈する。Ⅶ群1類。2～4は炉内混入で3はⅦ群2類。4～7はⅧ群2・3類の胴片。8は口唇に円形刺突文と太い沈線をもつ口縁片でⅦ群2類。16は横刃の打製石斧で硬砂岩製。

3.　2号住居址（第37図）

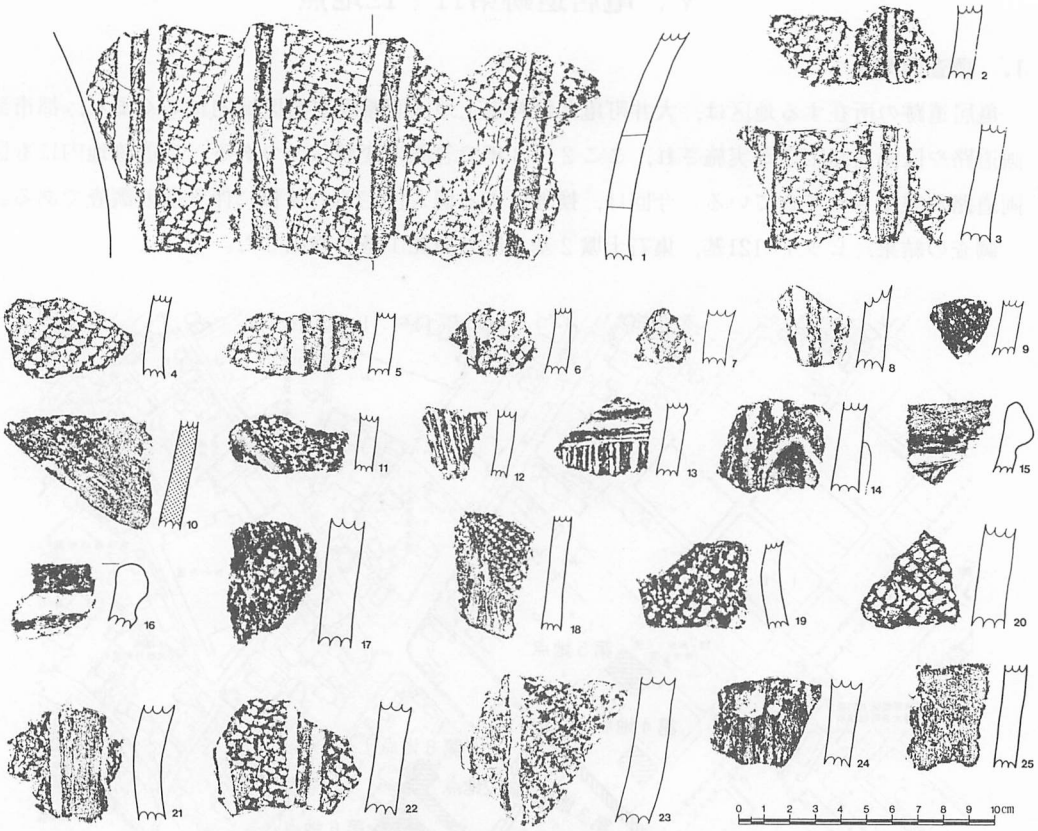
1号住居址同様掘り方を確認できなかった。形態・規模については不明。

炉　　ピット分布より北に位置する。焼土の範囲は径80cmの範囲でほぼ円形の部分に認められ，掘り込み上端は削平され，下端のみ残存する。地床炉で炉底はよく焼けている。

ピット　南側に4基確認。炉の真南 330cmの部分に埋甕を検出。胴部中位が埋設されていた。



第37図　西ノ原遺跡第22地点　2号住居址（$\frac{1}{60}$）



第38図　西ノ原遺跡第22地点　2号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）

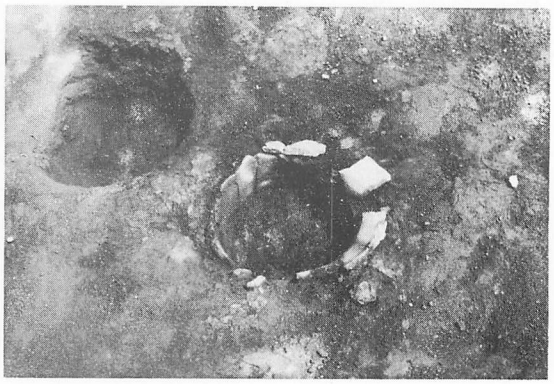
●遺物（38図）　埋甕（1～8）　中形深鉢の胴上半の大形破片と直接接合しない同一個体片で胴上部径24cm。地文はＬＲの縄文で，直下懸垂文が10本描かれる。懸垂文は両側の太い沈線間を1～1.5cmほどを磨消してつくられ磨消懸垂文としている。胎土には白色砂粒・細砂粒・ローム粒を大量に含み，焼成は良好でなく褐色ないし暗褐色を呈する。Ⅷ群3類のうち新式である。9はＲＬの細かい縄文をもつ胴片であるが磨滅著しい。埋甕近くへの流入品である。10～25は，ピット出土の土器片である。10は擦痕の痕跡を残す胴部片で胎土に植物繊維とローム粒を含み明褐色を呈するⅡ群2類末のもの。11・12は撚糸文を地文とする胴片であるがⅧ群1～2類のもの。13は横走する細沈線と下方に櫛引細沈線をもち胎土に雲母末と白色微砂粒を含む。14は太い貼付隆帯末端の残る無文部片。14・15は沈線のみが残る口縁部細片でともに胎土に粗砂粒・微砂粒・ローム粒を含む。13～15はⅧ群2類であろう。17～20は地文縄文部のみの胴部片。21～23は地文が縄文で磨消を伴う懸垂文をもつ胴片で21･22はＬＲ，23はＲＬ縄文であり，21・23の懸垂文の磨消部幅は2cmに達する磨消部をもつⅧ群3・4類の胴片である。24・25は無文部胴片で胎土に大量のローム粒を含み25は焼成良好。Ⅷ群に伴うものであろう。

今回の調査で検出された2軒の住居址は共に出土遺物が少なかったが，埋設土器から判断しで時期は1号住居址が第Ⅶ群2類期，2号住居址は第Ⅷ群3類期に比定できよう。

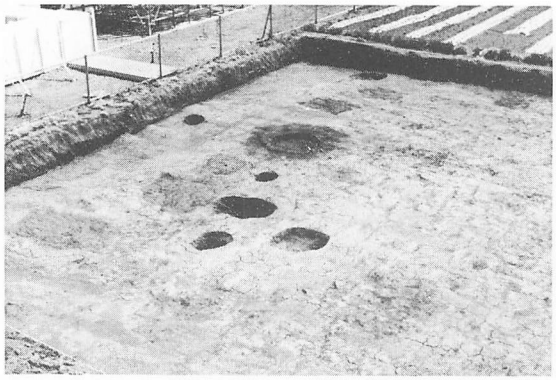
鶴ケ舞遺跡　調査区近景

鶴ケ舞遺跡　溝 状 遺 構

西ノ原遺跡　１号住居址

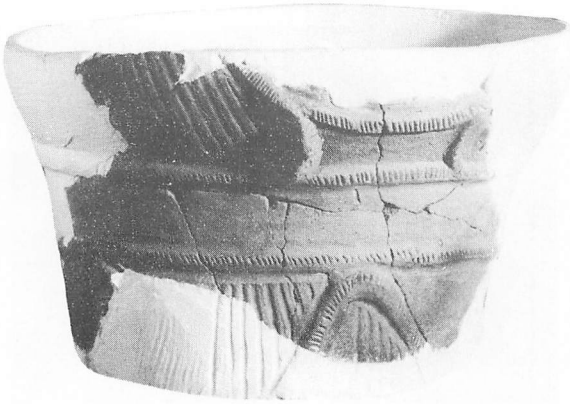


西ノ原遺跡　１号住居址　炉

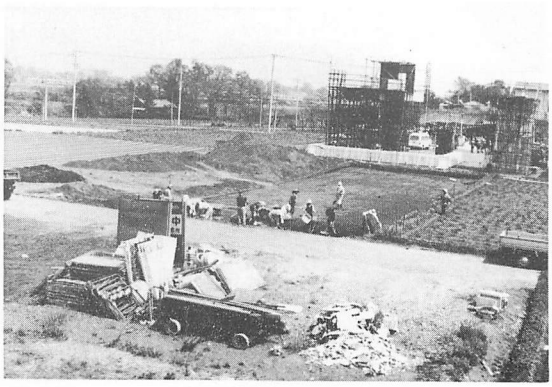


西ノ原遺跡　２号住居址

西ノ原遺跡　２号住居址　埋　甕



西ノ原遺跡　１号住居址　炉体土器



西ノ原遺跡　調 査 風 景